

## 第3章 対話による社会構築とワールド・カフェの社会的価値

これまで、ワールド・カフェという手法の位置づけや先行研究を検討し、標準的なワールド・カフェを紹介してきたが、本章では、ワールド・カフェに話し合いの手法以上の新たな社会的価値を与えたい。それは、社会や世界を構築していく一つ的手段である対話を生み出す装置としてのワールド・カフェという位置づけである。

また、筆者は序章で、本研究の意義は「対話による社会構築への一助となることである」と述べたが、どのように対話が社会を構築していくのかについては細かく触れていない。そこで、本章では、筆者が考える社会構築の在り様や考え方を述べ、社会構築の有効な手段としての対話、加えて、そうした対話を誘発する装置としてのワールド・カフェが果たす役割について論じていく。

### 3-1 社会の捉え方

#### 3-1-1 私たちは異なった「環世界」に生きている

対話はどのように社会を構築していくのか。本章では、この問いに一つの回答を導き出したい。しかし、この問いを考えるには、まず、「社会はどのように構築されているのか」という社会構築の在り様や考え方について述べる必要があるだろう。

そこで、社会はどのように構築されているのかについて考えてみると、この問いには数えきれない程の答えが返ってくると思われる。その理由としては、元々「社会」という言葉自体が *society* などの西欧語の翻訳語として始まり、当時から曖昧な言葉として使用されていた<sup>1</sup>ことも関係すると思われるが、それに加え、その人が社会をどのように捉えているのか、どのように社会を認識しているか、どのような実感を持って生きているのかによって、その人の「社会」が決まるからである。

例えば、生まれたばかりの赤ちゃんにとっては、ベッドから見える世界が社会であるだろうし、その後、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学、企業というように環境が変化していくと、徐々にその人の捉える社会は広がっていく。同時に、インターネットや本などから、直接に知覚や体験していない世界までも社会と捉えるようになる。アメリカに行ったことがないとしても、アメリカが存在していることを知っているし、アメリカという国があるということを前提とした世界に生きているのである。

社会学者の真木悠介の著書『気流の鳴る音』の中では、メキシコ北部に住むヤキ族の老人ドン・ファンの「世界の捉え方」が以下のように紹介されている。

---

<sup>1</sup> 柳父章『翻訳語成立事情』岩波新書（1982）

「われわれは「世界」の中に生きている。けれども「世界」は一つではなく、無数の「世界」が存在している。「世界」はいわば、＜世界＞そのものの中にうかぶ島のようなものだ。けれども、この島の中には、＜世界＞の中のあらゆる項目を取り込むことができる。夜露が満天の星を宿すように、「世界」は＜世界＞のすべてを映す。球面のどこまでいっても涯がなく、しかもとじられているように、「世界」も涯がない。それは、「世界」が唯一の＜世界＞だからではなく、「世界」が日常生活の中で、自己完結しているからである。」<sup>2</sup>

要するに、ドン・ファンは、客観的世界としての＜世界＞は存在するが、人々はその＜世界＞に生きているのではなく、＜世界＞から映し出された無数の「世界」に生きていると考えている。そして、この発想は「社会」にも置き換えることが可能である。客観的な事実としての＜社会＞は存在するが、人々が実際に生きて暮らしているのは無数に存在する「社会」であると言えるだろう。つまり、その人が捉えた社会がその人にとっての社会である。そして、人々はその社会に生きている。

このような世界観について、他にも似たような捉え方をしている学者がいる。理論生物学者ヤーコプ・フォン・ユクスキュルは「環世界」という言葉を使って、このような世界観を述べている<sup>3</sup>。多くの人々は、自分たちも含めたあらゆる生物が一つの世界の中で生きていて、同じ時間と同じ空間を生きていると考えているが、ユクスキュルはそこを疑った。つまり、すべての生物がその中に置かれているような単一の世界などは存在せず、すべての生物は別々の時間と空間を生きていると考えたのである。例えば、アゲハチョウの場合、紫外線を感じることができる為、紫外線が感じられる世界に生きている。また、著書『生物から見た世界』の中では、ダニや犬や鳥などのあらゆる生物の例を出しながら、生物は異なった環世界に生きていることが検証されている。そして、最後の結びでは、天文学者の環世界を例に挙げ、人間同士も環世界に生きていることを論じている。要するに、人間も他の生物と同様に、単一の世界に生きているのではなく、それぞれが異なった環世界に生きているのであり、幻想の中に生きている。

動物行動学者の日高敏隆は、こうした環世界を作り出している幻想のようなものを、幻覚、幻影、幻想、錯覚などの多様な意味合いを含む「イリュージョン」と名付けた。そして、日高は、人間と人間以外の動物のイリュージョンの違いについて、「人間も動物以外の動物も、イリュージョンによってしか世界を認知し構築し得ない。そして何らかの世界を認知し得ない限り、生きていくことはできない。人間以外の動物の持つイリュージョンは、知覚の枠によって限定されているようである。けれど、人間は知覚の枠を超えて理論的にイリュージョンを構築できる。」<sup>4</sup>と述べている。つまり、人間はイリュージョンを理論的に

---

<sup>2</sup> 真木悠介『気流の鳴る音』ちくま学芸文庫（2003）43-44頁（初版：1977）

<sup>3</sup> ユクスキュル、クリサート、訳：日高敏隆、羽田節子『生物から見た世界』岩波文庫（2005）（初版：1934）

<sup>4</sup> 日高敏隆『動物と人間の世界認識 イリュージョンなしに世界は見えない』ちくま学芸文庫（2007）195頁（初版：2003）

構築できると考えられている。

そこで、一つの例を挙げよう。例えば、ほんの50年程前までは、日本のキツネが暮らしている地域では、「人間がキツネにだまされていた」という話が日常のごくありふれたものの一つであった。これも一つのイリュージョンである。哲学者内山節の著書『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』によると、1965年頃を境にして、日本の社会からキツネにだまされたという話が発生しなくなるのだが、その原因として、高度成長期の人間の変化、科学の時代の人間の変化、情報やコミュニケーションの変化、教育の変化、死生観の変化、自然観の変化などが挙げられている。もちろん、これらも全てイリュージョンである。さらに、興味深いのは、山奥のある村で内山が聞いた話である。それは、当時のその村人は当たり前キツネにだまされていたのだが、なぜか「外国人はだまされなかった」という話である。そのことが不思議な話としてその後も受け継がれたという。その理由について、内山は以下のように述べている。

「おそらくその理由は、その人を包み込んでいる世界が違うから、なのであろう。村人を包んでいる自然の世界や生命の世界と、その外国人たちを包んでいた自然の世界や生命の世界が、客観的世界としては同じものでも、とらえた世界としては異なっている。それがこのようなことを生じさせたのだらうと思う。」<sup>5</sup>

つまり、同じ空間（客観的世界）に人間が存在していたとしても、人間は単一の同じ世界に生きているわけではなく、イリュージョンによって作られた異なった環世界の中で生きているのであり、社会とはこうした異なった環世界の重なりによって構築されていると考えられる。

### 3-1-2 思考が共有されることによって構築される社会

人間は異なったイリュージョンによって作られた環世界に生きている。とすると、このようなイリュージョンなるものはどのように形成されているのだろうか。

環世界を作り出している幻想のようなものを「イリュージョン」と日高は名付けたが、こうした幻想のようなものを「イメージ」と捉え直すこともできる。現代社会では、テレビやインターネットや本などの様々なメディアから、自分が直接触れたり、直接感じたりしていない情報が容易に手に入れられるようになった為、自分が身体的に捉えている現実ではなく、それらの間接的な情報を基に人々が勝手にイメージしたことが現実を構築し始めている。例えば、2011年3月11日の東日本大震災後も様々な場面で人々はイメージによって現実を構築しては、その現実の中で行動せざるをえなかった。テレビなどのマ

---

<sup>5</sup> 内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』講談社現代新書（2007）115頁

メディアの情報では流れていない情報が twitter や facebook などのソーシャルメディアで流れ、人々は多様な情報によって翻弄された。そして、いち早く放射性物質が空気中を飛んでいることをイメージしていた人々は避難するか、外出を控えるか、外出する際にはマスクをしていただろうし、「とろろ昆布を食べることで放射性ヨウ素が甲状腺に蓄積するのを防ぐ」と信じた人々はとろろ昆布を購入していただろう。つまり、イメージによって作られた現実の中で人々は判断し、行動をしていたと思われる。このような「イメージが現実を作っていく」事態は、60年代初頭に既に政治思想家の丸山真男が以下のように述べている。

「本物自身の全体の姿というものを、われわれが感知し、確かめることができないので、現実にはそういうイメージを頼りにして、多くの人々が判断し行動していると、実際はそのイメージがどんなに幻想であり、間違っていようと、どんな原物と離れていようと、それにはおかまいなく、そういうイメージが新たな現実を作り出していく—イリュージョンの方が現実よりも一層リアルな意味をもつという逆説的な事態が起こるのではないかと思うのであります。」<sup>6</sup>

要するに、事実とイメージがかけ離れていようと、構築されたイメージによって、その人の現実と社会は決定するのであり、そのイメージを基盤として、人々は実際に判断し、行動している。つまり、イメージによって構築された社会の中で人々は生きている。

さらに、このような「イメージが現実を作っていく」といった社会構想の在り様は、フランスの政治思想家トクヴィルの社会分析の方法にも似ている。内山は、トクヴィルの社会の捉え方について、「彼はその社会にどのような精神の習慣があつて、そういう精神の習慣があるからこういう社会であるというとらえ方をしている」<sup>7</sup>と紹介し、戦後の日本人は皆が経済成長を願っている精神の習慣を持っていたから、日本の社会は経済成長を追いかける社会として構造化され、女性は結婚すれば家庭に入るのが当然だという精神の習慣をもった社会であれば、そういう社会構造ができてくる、という例を挙げている。つまり、ここで言う精神の習慣とは、人々が当たり前で思い込んでしまっている固定概念であり、お互いに疑う余地がなく、いつの間にか共有してしまっている共通のイメージとも言えるだろう。

したがって、人々が実際にどのようなイメージを持ち、どのような精神の習慣を持って暮らしているのかによって、社会が構築されていくのである。

ただし、ここで注意しなければならないことが一点ある。それは、たった一人で、特定のイメージや精神の習慣を持ったとしても、その人にとっての社会（環世界）が変わるだけであり、他者と共に生きている社会が変わるわけではないことである。とすると、イメ

<sup>6</sup> 丸山真男『日本の思想』岩波新書（1961）127-128頁

<sup>7</sup> 内山節『内山節の ローカリズム原論 新しい共同体をデザインする』21世紀社会デザインセンター（2012）55頁

ーじや精神の習慣が社会を構築するというのは、誰かとそれらを共有してこそ、はじめて機能すると考えられる。例えば、1万円という貨幣が1万円という価値を発揮するのは、そのような価値であることを互いに共有し、信じ合っているからこそ、である。

以上のことをまとめると、「イリュージョン」や「イメージ」や「精神の習慣」というものが人と人との間で共有されることによって、そのような現実や社会が作られていくと言える。そして、それらの共通点を、人々が意識的にも無意識的にも「思っていること」や「考えていること」であると考えれば、社会は「思考」が共有されることによって構築されていると考えても良いだろう。

したがって、社会とは思考が共有されることによって構築されている。

### 3-1-3 「見せられ」「感じされられ」「考えさせられる」構造主義

社会は思考が共有されることによって構築されている。前節でそのように述べたが、この思考とは、意識的に主体的に人々が「共有して」いるというよりかは、ほとんどが無意識的に「共有されて」しまっていることが多いように思われる。つまり、能動的ではなく、受動的に、あらゆる思考を共有されているのである。

例えば、日本人は日本語で話をする。この自明のことは、自分の選択とは関係なく、日本に生まれた以上、いつの間にか共有されてしまっていることである。しかし、日本人だからといって、日本語を話さなければいけないわけではない。後に英語を習い、英語でコミュニケーションを取りたいと考えたとしても良い。ただし、この場合も、自分一人だけではそのような社会は成り得ない。誰かと「英語でコミュニケーション取ろうよ」ということを共有することによって、はじめて、そうした現実が作られる。このように、主体的にある思考を共有しようとしても、他者と共有することができなければ、結果、それは実現されない。そして、多くの人々の間に「共有されて」いることがその社会の常識や慣習となり、人々の振る舞いや判断や行動を規定すると考えられる。

こうした考え方は、既に「構造主義」と呼ばれている。現代は「ポスト構造主義の時代」と言われているが、ポストとは「…以後」を意味するラテン語であることから、「構造主義以後の時代」である。とはいえ、構造主義が終わった時代を指しているわけではない。この時代とは、構造主義の思考方法があまりにも深く私たちの物の考え方や感じ方の中に浸透してしまったために、その発想方法そのものが自明のものになってしまった時代である<sup>8</sup>。思想家の内田樹は、分かりやすく構造主義を一言で以下のように説明している。

「私たちはつねにある時代、ある地域、ある社会集団に属しており、その条件が私たちのものの見方、感じ方、考え方を基本的なところで決定している。だから、私

---

<sup>8</sup> 内田樹『寝ながら学べる構造主義』文春新書（2002）17頁

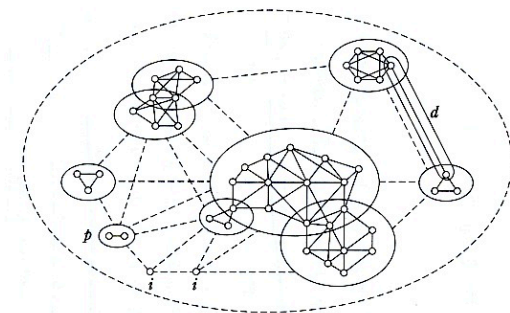
たちは自分が思っているほど、自由に、あるいは主体的にもものを見ているわけではない。むしろ私たちは、ほとんどの場合、自分の属する社会集団が受け入れたものだけを選択的に「見せられ」「感じさせられ」「考えさせられている」。そして自分の属する社会集団が無意識的に排除してしまったものは、そもそも私たちの視野に入ることがなく、それゆえ、私たちの感受性に触れることも、私たちの思索の主題になることもない。」<sup>9</sup>

つまり、人々は主体的に思考を共有して自分の生きる「世界」を構築し、社会を作ることでもできるが、それよりも以前に、ある時代、ある地域、自分の属する社会集団が無意識的に多くの思考を共有していると言える。そして、その思考によって、私たちの大半の判断や行動は、ある程度規定されている。したがって、私たちは、見せられ、感じさせられ、考えさせられて、生きている。

### 3-2 社会構想を実現するための対話

意識的にも無意識的にも思考を共有することによって社会が構築されているとするならば、異なった思考を共有している異なる他者や社会はどのように共存できるのだろうか。

この問いを考える上で、社会学者見田宗介の「交響圏とルール圏」の発想が非常に参考になる。まず、見田は社会の理想的なあり方を構想する仕方には、原的に異なった二つの発想の様式があると考えた。一つは、喜びと感動に充ちた生のあり方、関係のあり方を追求し、現実の内に実現することをめざすものであり、もう一つは、人間が相互に他者として生きるということの現実から来る不幸や抑圧を、最小のものに止めるルールを明確化してゆこうとするものである。前者は<交響圏>を作る仕方であり、後者は<ルール圏>を作る仕方である（図7-1）。



i : 単独者、というユニット p : 対、というユニット  
d : このdが、いくつもの海をへだてた距離であることもある。

図3-1 交響圏とルール圏のモデル

出典) 見田宗介『社会学入門』岩波新書(2006)191頁から転載

<sup>9</sup> 内田樹『寝ながら学べる構造主義』文春新書(2002)25頁

図3-1では、一番小さな丸は一人の人間を示し、実線で囲っている範囲を〈交響圏〉とし、点線で結ばれている部分を〈ルール圏〉としている。また、交響圏の圏域は、5人、20人、100人等、上限を設定できないが、大小異なる交響圏があることを示し、最小単位として、「対」というユニット、「単独者」というユニットも同等に認定している。

この社会構想のモデルに、これまでに述べてきた「思考を共有することによって構築される社会」という発想を照らしてみると、思考を共有することによって、こうした〈交響圏〉が構築されていると考えることができる。なぜならば、交響圏における喜びと感動に充ちた生のあり方、関係のあり方を実現させるには、「喜びと感動に充ちた生のあり方・関係のあり方」という思考がある程度同質のものとして交響圏内の人々に共有されている必要があるからである。つまり、誰かの喜びと感動が、誰かの不幸に連結する度合いが高いならば、もはや、そこは交響圏ではなく、ルール圏と言えるだろう。

さらに、見田が図3-1で示しているように、異なる交響圏同士の間にはルールが必要である。ここで言う「ルール」とは、他者の喜びが自己にとっては喜びでなく、自己の喜びが他者にとっては喜びでない限りにおいて必要とされるものであると見田は考えている。例えば、銃の保持を非とする社会と銃の保持を是とする社会があった場合、両者はそれぞれ異なった思考を共有していると言える。そこで、もし仮に、お互いが共存を目指すならば、両者で共に在れるようなルールを作る必要があるだろう。

では、こうした交響圏やルール圏をどのように構築していくのだろうか。見田は、このような社会構想の理想の在り様を提示しているが、具体的にどのように交響圏やルール圏を作っていくのかについてはあまり触れていない。そこで、筆者は交響圏やルール圏を作っていく手段の一つに「対話」があるのではないかと考えている。

第1章(1-1-2)では、ボームの対話を、「誰もがさまざまな種類の想定(意見)を持っていることを前提に、そうした想定や思考プロセスや言葉の意味をよく見ながら、人間的な経験という、並外れて広い範囲を探るコミュニケーションのプロセスである」と紹介したが、まさに、このような対話がルールを作っていく際には重要となると思われる。なぜならば、ルールが必要な場面とは、先に述べたように、他者の喜びが自己にとっては喜びでなく、自己の喜びが他者にとっては喜びでない限りにおいてである為、お互いの思考の差異を顕在化させるところから始める必要があるからである。他者の喜びが自己の喜びではなく、不幸につながっているとすれば、それを表明する必要があるし、仮に表明しなければ、他者はいっこうにそのことに気づかないかもしれない。また、その逆も考えられる。自己にとっての喜びが他者の不幸につながっていたとしても、その事実が顕在化されなければ、自ら気づくことは難しいと考えられる。したがって、それぞれの思考を顕在化させ、その思考をじっくり見るという対話の姿勢が求められる。また、このように対話することによって、お互いの思考の差異に気づき、それぞれの思考を生成した背景にまで目を向けることが可能となる。そして、そこから、「今後どうしていききたいのか」「どのようなルールが自分たちには必要なのか」についての探求が深まれば、新たな思考が創造

され、お互いを尊重する適切なルールが生まれる可能性が高まると考えられる。

一方、対話はルール圏だけではなく、交響圏においても必要であると思われる。なぜならば、交響圏においても多少のルールは存在するからである。見田は、人々の関係の在り方を<交響関係>と<ルール関係>に分け、この関係性は変化するものであると考えた(図3-2)。

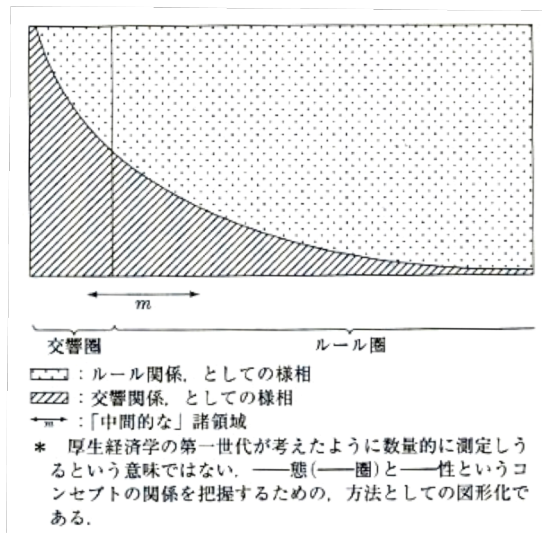


図3-2 交響圏とルール圏における交響関係とルール関係

出典) 見田宗介『社会学入門』岩波新書(2006)195頁から転載

図3-2の<交響圏>の一番左側は100%の交響関係を示しているが、純化された極限のようなものは理念型としてしか存在しないと考え、「どんな交響体も、現実の集団として年月を持続してゆく限り、さまざまな願望たちの間に折り合いをつける、ルールの関係の補助的な導入を必要とする」<sup>10</sup>と見田は考えている。つまり、単なる交響関係だけの圏域を交響圏としているわけではなく、交響関係の割合が高い圏域を交響圏としている。したがって、交響圏内のルール関係の割合は異なるにしても、多少の「ルール」は必要である。とすると、それは同時に、対話が必要であることも意味している。

以上のことから、社会構想としての交響圏とルール圏を具体的に形成していく為には、「対話」が一つのアプローチとして重要である。

### 3-3 「対話の基礎体力づくりの場」としてのワールド・カフェ

社会構想としての交響圏とルール圏の形成には対話が重要である、と前節では述べたが、「対話」と言っても、「話せば、何とかなる」というような容易いことではない。気がつけ

<sup>10</sup> 見田宗介『社会学入門』岩波新書(2006)196頁



ば、会話はただの「雑談」で終わってしまうこともあれば、相手の意見を打ち負かして自分の主張を通すだけの「議論」に終始してしまうこともあるからである。

そこで、対話（ダイアログ）を基盤とした話し合いの手法であるホールシステム・アプローチが対話を誘発する仕組みとして有効に機能すると考えられる。したがって、ホールシステム・アプローチの一つでもあるワールド・カフェは、対話を誘発する装置として位置づけられる。

しかし、ワールド・カフェという手法だけでは、交響圏やルール圏の形成にはおそらく不十分であると思われる。なぜならば、ワールド・カフェは相互理解を深め、新たなアイデアを創造することには適しているが、最終的な合意形成や意思決定には適していないと言われているからである。ワールド・カフェが適していない場合としては、以下の6点が挙げられている<sup>11</sup>。

- (1) 一方的に情報提供を行う場合
- (2) 結論や意思決定を行わなければならない場合
- (3) すでに決定している施策の実行計画を策定する場合
- (4) アイディアを出すことだけが目的の場合
- (5) 参加者同士が激しく対立している場合
- (6) 1時間半以上の時間が取れない場合

要するに、ワールド・カフェは、対話を誘発する為には非常に優れた手法ではあるが、話し合いの場の全てに万能であるというわけではない。

では、なぜ、他にも多様な対話の手法があるにも関わらず、筆者はワールド・カフェに着目しているのか。それは、ワールド・カフェは、その席替えの仕組みと深い問いによって短時間で多角的な視点が得られる為、対話をしていく上で最も重要だと思われる対話の基礎姿勢、言い換えるならば、「対話の基礎体力」のようなものを育む場として機能すると考えているからである。

ここで言う「対話の基礎体力」とは、第1章（1-1-2）で述べたボームの対話を参照するならば、「誰もがさまざまな種類の想定（意見）を持っていることを前提に、そうした想定や思考プロセスや言葉の意味をよく見ること」である。つまり、お互いが違う価値観（想定）を持っていることを前提として、お互いの価値観を顕在化させて、それをよく見る能力と言える。また、筆者の卒業論文『ワールド・カフェで起こる対話の構造』<sup>12</sup>での対話の定義を参照するならば、対話の基礎体力は、まさに、初期段階「価値観の差異を前提

---

<sup>11</sup> 香取一昭、大川恒『ホールシステム・アプローチ 1000人以上でもとことん話し合える方法』日本経済新聞出版社（2011）182頁

<sup>12</sup> 古瀬正也「ワールド・カフェで起こる対話の構造-47 都道府県での実践からの考察-」『2010年度駒沢大学 GMS 学部金山研究会卒業論文集』（2011. 1）

とすること」と第二段階「自分自身と相手の価値観に目に向けること」を指すだろう。つまり、対話の基礎体力とは、価値観の差異を前提として、自分自身と相手の価値観に目に向けることのできる能力と言える。

また、対話の最終段階の「共に新たな価値観を生み出すこと」に関しては、対話のプロセスの結果として生じるものであると捉えると、その前の段階である対話の基本体力がいかに備わっているかが重要であると考えられる。例えば、スポーツでは、基礎体力があるかどうかは大切であり、基礎体力という土台があるからこそ技術力や戦略が活かされる。つまり、基礎体力がしっかりと構築されていないスポーツ選手は、どんなに技術力を磨く練習をしても技術力を習得することは難しいと思われる。それと同じように、表面的な意思決定や合意形成やファシリテーションの技術ばかりを身につけようとしても、対話の基礎体力がしっかりと構築されていないと、より良い対話はできないだろう。

したがって、対話の基礎体力を向上することから始める必要がある。そして、既に卒業論文の結果として、ワールド・カフェは対話の初期段階「価値観の差異を前提とすること」が頻繁に起こることを筆者は明らかにしている。また、卒業論文では対話の第二段階「自分自身と相手の価値観に目に向けること」に関する考察が欠如しているが、第二段階は、初期段階を経てすぐに起こると考えられる。なぜならば、価値観の差異に気づくということは、自分と相手の価値観に少しでも目を向け始めていることを意味するからである。つまり、この第二段階は自分と相手の価値観の違いを見つめていく度合いのプロセスを表現している。要するに、ワールド・カフェで対話の第一段階が頻繁に起こるということは、見つめる度合いは低いとしても、第二段階の入り口に移行していることを意味する。したがって、ワールド・カフェは対話の第一段階と第二段階を頻繁に起こすと考えられることから、「対話の基礎体力づくりの場」として機能すると思われる。

以上のことをまとめると、交響圏とルール圏という社会構想を形成していくには対話が必要であり、その対話を誘発する装置の一つとしてワールド・カフェが位置づけられる。さらに、ワールド・カフェは参加者一人一人の「対話の基礎体力づくりの場」としても機能すると考えられる。

### 3-4 「意識変革の装置」としてのワールド・カフェ

筆者の卒業論文『ワールド・カフェで起こる対話の構造』では、ワールド・カフェは対話の最終段階「共に新たな価値観を生み出すこと」を稀に起こす手法であると結論づけた。つまり、場合によっては、ワールド・カフェを通して、対話の最終段階に達する可能性があることを意味している。

そして、最終段階に達するためには個々人の「意識変革」が必要であると思われる。例えば、ある人が「A」という価値観、もう一人が「B」という価値観を持っていたとする。そして、対話の結果として、元々両者にはなかった新たな価値観「C」が生まれたとしたら、

「A→C」「B→C」という意識変革がお互いに起こっていたと言える。つまり、対話の結果、新たな価値観が創造されるということは、お互いが意識変革をした結果であると捉えることができる。

このことから、本節では、意識や思考が変革するプロセスである U 理論を紹介し、その中で対話がどのように位置づけられ、ワールド・カフェはどのような役割を担い得るのかを論じ、「意識変革の装置」としてのワールド・カフェという新たな価値を付与する。

### 3-4-1 意識変革の理論—U 理論

近年、変革と学習の理論である「U 理論」が発表された。U 理論とは、マサチューセッツ工科大学 (MIT) 上級講師である C・オットー・シャーマーが提唱した意識変革の理論であり、過去や偏見にとらわれず、本当に必要な変化を生み出す技術である。この理論が従来の理論と大きく異なるのは、過去から学ぶのではなく、未来から学ぶ点である。アメリカの哲学者ジョン・デューイが提唱した学習サイクルは「観察」「発見」「新たな行動の発明」「新たな行動の創出」の4段階から成っており、デューイ以降、学者やコンサルタントが開発した学習サイクルは、いずれも、この学習モデルの変形だったと言える。しかし、U 理論は、「過去ではなく、まだ起きていない未来から学び、その未来を実現するために自分が何をすべきかをたえず見出していく。過去が未来の良き指標である時には、過去に学ぶだけでいい。だが、まったく新たな力によって変化が起きつつある時、過去に学ぶだけでは、大きな変化には気づけない」<sup>13</sup>のである。

U 理論は、以下の図 3-3 のように大きな3つの動きから成り立っている。「ひたすら観察する」ことによって世界と一体となる段階【センシング】、「後ろに下がり、内省する」ことによって内なる知が浮かび上がる段階【プレゼンシング】、「流れにそって素早く動く」段階の【リアライジング】の3つである。

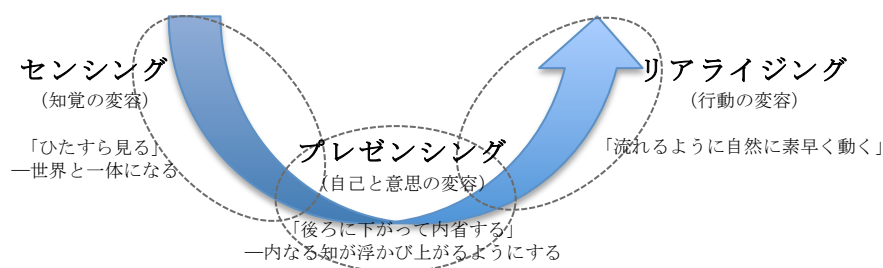


図 3-3 U 理論の大きな3つの動き

出典) ピーター・センゲ [その他の著者省略]『出現する未来』講談社 (2006) 110 頁と 261 頁を参照

<sup>13</sup> ピーター・センゲ、C・オットー・シャーマー、ジョゼフ・ジャウオースキー、ベティ・スー・フラワーズ著、監訳：野中郁次郎、翻訳：高遠裕子『出現する未来』講談社 (2006) 109 頁

センシング (sensing) は、U 理論の U を下っていくプロセスであり、慣習的な物の見方を保留したり、視点を転換したりして、全体を感じ取る段階である。そして、U を下って行った先の一番底がプレゼンシングである。プレゼンシング (presencing) は、sensing (感じ取る) と presence (存在) の混成語で、未来の可能性の源とつながり、それを今に持ち込むことである。プレゼンシングの状態へと移っていくと、人々は自分次第で現実になり得る可能性からものを見るようになる。いわば、現実を外部として見るのではなく、その現実のシステムの一部である自分自身に気づく瞬間でもあると言える。その後の U を上って行くプロセスはリアライジング (realising) であり、新しい何かを現実を持ち込むことである。行動は理性ではなく、もっと深い源から起き、流れるように自然に素早く動くことが重要視される。プレゼンシングからリアライジングにかけた説明として、U 理論の種を提供したと紹介されている経営学者ブライアン・アーサーは、「何をすべきかは、おのずとあきらかになる。急ぐことはできない。何をすべきかは、自分がどこから来たか、何者なのかにかかっている。できることは、未来の新しいビジョンに基づいて、自分を位置づけることだけだ。[中略] 何をすべきかは、『感じ取らなければならない』。後ろに下がって、観察する。サーファーや有能なレーシング・ドライバーのようなものだ。論理的に考えて行動する方法はとらない。感じるままに動き、走りながら理解する。考えることすらしない。その場と一体となることだ。」<sup>14</sup>と述べている。

これまで見てきた通り、U 理論の説明は抽象的な言葉が多く、理解するのは容易ではない。特に、自己と全体が一体化するものから知が浮かび上がる「プレゼンシング」は理解が難しいように思われる。その理由として、オットーと共に U 理論の開発をしている MIT 上級講師のピーター・センゲは「その感覚は微妙だからだ」と述べ、プレゼンシングの感じ方は人によって違うと考えている。また、プレゼンシングは、例えとして、針の穴を通り抜けた先に訪れるとも表現されている。古代エルサレムには「針」と呼ばれる狭い門があったが、ラクダは荷物をすべて降ろさなければ、その門を通ることができない。この話に困んで、プレゼンシングにおける針の穴とは、「そこを通り抜けるには必要のないすべてを捨てなければならない敷居のことで、これを通り抜けると、自分が機能する源が『我々を取り巻く人々』に移行する。今までとは別の方向から見ようになり、未来から自己に近づいていくようになる」<sup>15</sup>のである。つまり、プレゼンシングに至るには、今まで背負ってきたものを手放す必要がある。

以上、これまで大きな3つの動きとしての U 理論を説明してきたが、次に、より詳しい U 理論のプロセスの全体像を簡単に紹介しよう。以下の図3-4は、U 理論の7つのプロセスである。

<sup>14</sup> ピーター・センゲ [その他の著者省略] 『出現する未来』講談社 (2006) 107 頁

<sup>15</sup> C・オットー・シャーマー著、中土井僚、由佐美加子訳 『U 理論』英治出版 (2010) 243 頁

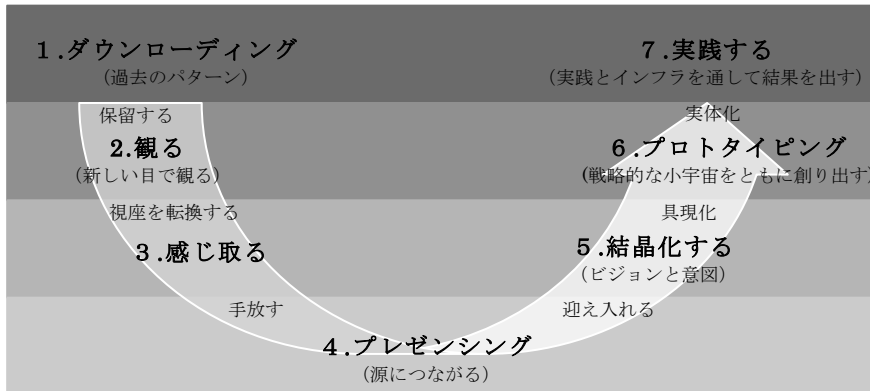


図3-4 U理論の7つのプロセス

出典) C・オットー・シャーマー著、中土井僚、由佐美加子訳『U理論』英治出版(2010)73頁を参照

1. ダウンロード (Downloading) : 過去のパターンを再具現化する—世界を自分の思考のいつもの物差しで見る
2. 観る (Seeing) : 判断を保留し、現実を新鮮な眼で見る—観察されるシステムは観察する者とは分離されている
3. 感じ取る (Sensing) : 視座を転換し、場に結合し状況全体に注意を向ける—観察する者と観察される者との境界がなくなり、システムがそれ自体を見るようになる
4. プレゼンシング (Presencing) : 執着を手放し、未来の領域が生まれてくるもっとも深い源につながる—源から見る
5. 結晶化する (Crystalyzing) : 現れるものを迎え入れ、新しい考えを出現する未来から見て明確化する
6. プロトタイピング (Prototyping) : 実践によって未来を切り拓く—新しいものを「宇宙との対話によって」具現化する
7. 実践する (Preforming) : 実体化させ、より大きな共進化する生態系の中に根づかせる

「ダウンロード」の段階では、人々は行為や思考の慣習的なパターンに従っていることが多い。おなじみの刺激はおなじみの反応を触発する。認知心理学では、誰もが心の奥底に持っているイメージや仮説のこと、または、独自の思考のフィルターや慣習的な思考のことを「メンタルモデル」と呼ぶが、ダウンロードでは既存のメンタルモデルをダウンロードしているのである。

この段階から、次の新しい目で「観る」段階に移行するには、このような慣習的な考え方や見方をやめることから始まる。それが「保留」である。保留するには、既存のメンタルモデルを破壊することは必要はなく、無視する必要もない。必要なのは、自分が持っている既存の枠組みやメンタルモデルを目の前に掲げることである。そうすることによって、

自分の心がどのように動いているか、つまり、自分の考え方やメンタルモデルに気づくようになる。

次に「観る」から「感じ取る」に移行するには、「視座を転換する」ことが必要である。自分のメンタルモデルを保留しながら観ることで聞き方が深くなり、しだいに、異なる視点や考え方の間にある空間に注意を払うようになる。そして、その状態にとどまる。すると、突如、目の前のすべての実例を生じさせている集合的なパターンが見えてくる。これが「視座の転換」である。それが起こると、人々は全体の場を感じ取りながら、ものを見始めるのである。

次の「プレゼンシング」は「感じ取る」と似ているが、「重要な違いは、感じ取ることが視座を現時点の全体性に移行するのに対し、プレゼンシングは出現する未来の全体の源、つまり、出現しようとしている未来の可能性に移行すること」<sup>16</sup>である。そして、そのような出現しようとしている未来の可能性に移行するには、古いものを手放し未知のものに委ねることが必要となる。

「プレゼンシング」の後のUの右側全体では、最後までプレゼンシング（源とつながり、源から機能すること）をし続けている状態であり、その最初のステップが「結晶化する」である。その段階は現れるものを迎え入れることで始まり、未来の最高の可能性からビジョンと意図を明らかにすることである。ビジョンとは目的の結晶であり、プレゼンシングから生まれるエネルギーや使命感の焦点を合わせるものである。目的を結晶化するには、全体の意思の声に耳を澄まし、想像力を駆使して、ひらめいた直感を行動の指標になる具体的なイメージやビジョンに変えなければならない。

次の段階「プロトタイピング」は、明確になったビジョンや意図を行動と実験すること（具現化すること）によって未来を探索することである。例えば、最終的なものを作り上げる前にコンセプトを提示し、速いサイクルのフィードバックによる学習と適応を可能にする。出現しつつある未来は、具体的な実験や即興、プロトタイピングに取り組まない限り、呼び出すことはできない。直感で何かひらめいた時、それを表明しようとし、その過程のフィードバックを素直に受け入れる努力をすれば、ひらめきはまったく違った形で明確になり、リアルなものになる。

最後の段階「実践する」は、それまでのプロトタイプを試みの最善の特徴を実体化させて、組織やシステムのインフラに埋め込むことで、現実に成果を出すことである。「プロトタイピング」の領域から「実践する」ことの領域へ移ると、主要な焦点は小宇宙の形成から大きな組織的な生態系の形成と進化へとシフトする。要するに、縮小されたシステムの中での実験から現実のシステムの中に新たな思考やイノベーションを持ち込むことである。そうして、うまく組み込まれた結果、現実に変化が起こるのである。

以上、これらの流れがU理論のプロセスである。ただし、ここで紹介した7つのプロセ

---

<sup>16</sup> C・オッター・シャーマー著、中土井僚、由佐美加子訳『U理論』英治出版（2010）215頁

スは、U 理論の全体の概略にしか過ぎない。しかし、U 理論における対話の位置づけを確認し、ワールド・カフェの役割を説明するには十分である。

### 3-4-2 U 理論における 4 つの会話の行動領域

これまで U 理論の全体像を紹介してきたが、オットーは、U 理論における会話の行動として、会話の領域が 4 つあることを述べている。それは、「彼らが聞きたいこと」というところから話す領域 1（ダウンローディング）、「私がほんとうに考えていること」というところから話す領域 2（討論）、「自分自身を全体の一部として観る」ところから話す領域 3（対話）、「自分と全体との間を流れている」ものから話す領域 4（プレゼンシング）の 4 つである（図 3-5）。

そして、オットーは、「この会話の領域構造とは相互作用のパターンであり、いったんそのパターンが会話に現れると、会話に参加しているすべての人によってそのパターンが繰り返される傾向がある」<sup>17</sup>と述べている。つまり、会話が一つのパターン（例：礼儀正しい）から別のパターン（例：心にあることを話す）へ移行すると、そのパターンの移行は一部の人だけではなく、たいていの場合、そこにいるすべての参加者に起こると言える。

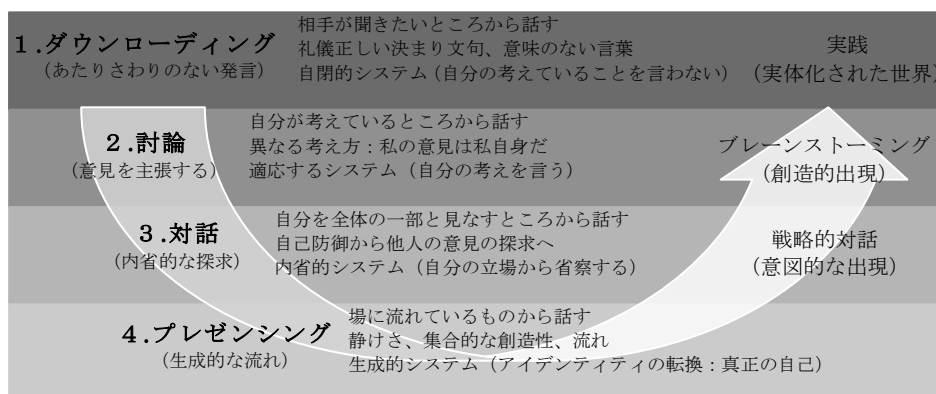


図 3-5 U 理論の会話の 4 つの領域

出典) C・オットー・シャーマー著、中土井僚、由佐美加子訳『U 理論』英治出版 (2010) 344 頁と 356 頁を参照

まず、一つ目の「領域 1 : ダウンローディング」から見てみよう。ダウンローディングでは、相手が聞きたいところから話をする。この種の会話でうまく効果を発揮する為には、実際の心の中にあることを言うのではなく、礼儀正しい決まり文句を言ったり、敬語を交わしたりといったその場の支配的なパターンに参加者が従うことが求められる。つまり、ダウンローディングの会話は、既存のルールや言い回しを単純に再現するだけという意味で、自分の枠の中心から起こっていると言える。

次の「領域 2 : 討議」の特徴は、参加者が自分の考えを口に出すということである。領

<sup>17</sup> C・オットー・シャーマー著、中土井僚、由佐美加子訳『U 理論』英治出版 (2010) 342 頁

領域1の会話に入る切符が順応することへの無言の要求に応じることであるのに対し、領域2への入場券は、人とは異なる立場を取り、異なる考え方を示す意欲である<sup>18</sup>。したがって、領域1の段階で会話に加わるためには、他人の意見に合わせる必要があり、領域2では、異なる意見や反対意見も表明する必要がある。討論型の会話は、議題についての異なる意見をすべてテーブルの上に並べられるという意味で、組織においては有益な場合もあるが、今起きている問題がこれまでの慣習的思考法や集団の支配的な思考の前提を内省し、変えることを必要とする場合は、さらに別のタイプの会話が必要となる。

そこで、次の「領域3：対話」がある。ここで言う「対話」とは、これまで述べてきた意味合いの対話と変わらないと考えても良い。討論から対話への移行は、自分とは異なる考えを打ち負かすということから、お互いの意見や価値観を探索し合い、他者の内側から共感して話を聴くということへの変化である。対話の領域へ移行すると視野が広がり、自分の考えを防御することをやめ、自分自身も観察の対象に含まれるようになり、さまざまな考え方を探索するようになる。つまり、世界を自分の外側にあるモノとして観ていた状態から、自分を全体のシステムの一部として世界と自分自身を観るようになる。そして、「自身が問題のシステムの一部であるとする観点から話すようになる」<sup>19</sup>。

最後に一番深い会話の領域が「領域4：プレゼンシング」である。この領域では、プレゼンシングの「出現しようとしている未来の源（可能性）」とつながった状態で話をしている。この領域での会話について、オットーは、ある対話グループの一人の言葉を借りて、以下のように紹介している。

「安易に話してはいけない、という気分になるの。声を必要としているより大きな存在に動かされたとき、私は話をする。（中略）そのとき私たちはその領域に自然に入っているの」<sup>20</sup>

つまり、私が話している時、私一人が話しているのではなく、他者が話している時、他者一人が話しているのではなく、私たちが一つの生命体として話しているように感じられる瞬間である。自分の意思で話すのではない。大きな「私たち」という存在によって、突き動かされ、語らせられ、必要な時に必要な人が話すべきことを話す。

最後の会話の領域4はU理論の7つのプロセスの「プレゼンシング」の時に現れるが、Uの右側へ駆け上がって行く時は、プレゼンシングがその後の「結晶化する」「プロトタイプング」「実践する」にも継続していたことと同じように、プレゼンシングに基づく会話も続く。具体的には、「戦略的対話（意図の出現）」、「ブレーンストーミング（創造の出現）」、「実践（実体化した出現）」と表現されているが、これらはすべて、プレゼンシングに基づく会

<sup>18</sup> C・オットー・シャーマー著、中土井僚、由佐美加子訳『U理論』英治出版（2010）348頁

<sup>19</sup> C・オットー・シャーマー著、中土井僚、由佐美加子訳『U理論』英治出版（2010）352頁

<sup>20</sup> C・オットー・シャーマー著、中土井僚、由佐美加子訳『U理論』英治出版（2010）353頁



話から起こるとされている。

以上、U 理論における会話の4つの領域を説明してきたが、領域が深まるにつれて、言葉が抽象的になっていったことが分かっただろう。特に、プレゼンシングは理解に苦しむことが多い。なぜならば、このプレゼンシングで起きていることは、理性で捉えることが困難である程に神秘的な体験でもあるからである。例えば、グアテマラが大きな内戦から復興しようとしていた時に、国家としてのシナリオ・プロジェクトのまとめ役をしていたアダム・カヘンは、プレゼンシングのその瞬間を「この部屋には精霊がいるような気がします」<sup>21</sup>と表現したこともあった。したがって、プレゼンシングは理性では理解されにくい深い現象である。そして、プレゼンシングの深さを決定づけるのが U の文字を下っていくセンシングであり、センシングでいかに深みまで下って行けるかにかかっていると言える。

### 3-4-3 センシングを誘導するワールド・カフェ

これまで U 理論の全体像と会話の4つの領域を紹介し、最後に、プレゼンシングの深さはセンシングの深まりで決まることを述べた。そして、このセンシングを下って行く為の具体的な手法として、ワールド・カフェが非常に適していると筆者は考えている。なぜならば、ワールド・カフェのプロセスは、まさに、センシングを下って行きやすい仕組みになっているからである。以下、ワールド・カフェの順序を追いながら、U 理論の概念と照らし合わせて、説明していこう。

まず、最初にワールド・カフェでは問いが発表される。すると、人々は思考し始める。しかし、はじめは、既存のメンタルモデルをダウンロードしている状態であり、誰が口火を切り、どのような出方をするのかを探りつつ、様子を伺っている。つまり、U 理論で言うところの領域1「ダウンローディング」である。ここでは、相手に合わせる事が重視される。

しかし、各テーブルには4人という少人数で、かつ、トーキング・オブジェクトを使用していた場合には一人一人が発言することがより促進されることによって、次第に、自分の考え方や意見を言わざるを得ない状況が生まれる。こうして、自分が考えているところから話す領域2「討論」の段階に自然と入っていく。

さらに、この会話の領域の進展のスピードはテーブルごとに異なると言える。なぜならば、既に述べたように、会話に参加している人の相互作用によって会話のパターンが繰り返されるからである。つまり、全員がいつまでも礼儀正しい決まり文句ばかりで話をして、一般常識として語り続けるならば、それは連鎖し続け、そのパターンが再生産される。したがって、第一ラウンドで、いつまでも社交辞令や一般論ばかりを話している場合もあれば、一気に深まり「討論」や「対話」や「プレゼンシング」の領域に移行する可能性も考

---

21 C・オットー・シャーマー著、中土井僚、由佐美加子訳『U 理論』英治出版（2010）354頁

えられる。しかし、「討論」の領域には容易く辿り着いたとしても、その次に続く「対話」「プレゼンシング」には容易には行けない。なぜならば、対話の領域に入るには「保留」と「視座の転換」が必要だからである。

しかし、「保留」に関しては、比較的、自然と誘発されると思われる。なぜならば、自分が考えるところから話す「討論」を続けていると、もちろん、自分とは異なる意見や考え方が出てくるようになるからである。つまり、自分とは異なる意見に触れることで、「もしかしたら、自分の意見だけが正しくないかもしれない」という気持ちが芽生え、自分の考え方や意見を絶対視せずに、一旦、相手や自分の意見を「保留」することが促される。そのようにして、領域3「対話」の段階に入って行く。そして、この領域に入ることで、自分や他者の意見を目の前に掲げ、客観的に眺めるようになる。

さらに、深い「対話」の領域に移行するには、次に、「視座の転換」が必要とされている。そして、「視座の転換」を促す仕掛けが、ワールド・カフェで言うところの第一ラウンド後の「席替え」であると考えられる。なぜならば、席を替えて、新しいメンバーで話し合うことで多様な意見や視点に触れることが可能となり、複数の意見が集まることで整理され、パターンや傾向が浮き彫りになることが促進されるからである。また、同時に、テーブル上の模造紙には多様なメモが描かれ、複数の視点が視覚化されていることで、第二ラウンドでは多様な視点が顕在化・可視化してくる。すると、突如として、一つ一つの意見やアイデアがつながり、集合的なパターンが見えるようになり、「視座の転換」が起こると考えられる。さらに、こうした「視座の転換」の条件としては、多様な視点の顕在化、そして、その間に流れているものをよく観ることであると言われている。

次に、第二ラウンドが終わると、基本的には最初のテーブルに人々は戻り、第三ラウンドの話し合いが始まる。第三ラウンドでは、旅先で得られた多様な視点を持ち寄る為、さらに、視点が増える。そうすることで、「保留」と「視座の転換」がより起こりやすくなると言える。

したがって、ワールド・カフェでは、「討論」を続けているうちに、多様な意見が顕在化し、自然に「保留」が起こりやすくなっていると思われる。また、「席替え」をすることで視点が増え、その多様な視点の間に流れるものが浮き彫りになる為、「視座の転換」も起こりやすくなる。つまり、ワールド・カフェには、領域3の「対話」に移行しやすくなる仕組みが組み込まれていると考えられる。

また、最後に、第三ラウンドが終わると、全体セッションの時間となり、3ラウンドで得られた考えやアイデアを共有し、全員で話し合う。ここでも、より視点が増え、「保留」と「視座の転換」が促進されると考えられる。しかし、最終的に会話が「プレゼンシング」の領域にまで到達するかどうかまでは保証されていないと思われる。なぜならば、この最後の全体セッションの具体的な方法は特に決まっておらず、主催者に自由に委ねられているからである。つまり、標準的なワールド・カフェとしては、「プレゼンシング」を誘導するまでの仕掛けは組み込まれていないと言っても良いだろう。

以上、ワールド・カフェの手順について U 理論を用いて説明してきたが、ワールド・カフェはその仕組み上、「ダウンローディング」から「討議」へ、「討議」から「対話」へ移行させるには非常に適していると言える。また、「プレゼンシング」に関しては、ワールド・カフェの標準的な仕組みからは誘発できるかどうかは保証できないが、全体セッションの工夫次第では可能と考えることができる。

したがって、意識変革の前半の過程、要するに、U 理論の「センシング」を担い得ることが明らかとなったことから、ワールド・カフェは、「意識変革の装置」として新たに位置づけられる。

また、ワールド・カフェが「意識変革の装置」として機能するという事は、ワールド・カフェには対話の最終段階「共に新たな価値観を生み出すこと」を誘発する仕組みがあることを意味する。そして、本章（3-1）で述べてきた、社会構想の考え方から見れば、共に新たな価値観を生み出す行為とは、まさに、対話によって共に社会を構築していると考えられるだろう。

### 3-5 ワールド・カフェ・デザイン研究の社会的意義

最後に、本章で論じてきたことをまとめ、ワールド・カフェ・デザイン研究とどのようにつながるのかについて述べる。

本章では、まず、社会の捉え方として、「社会は思考が共有されることによって構築されている」と考えた。そして、そのような社会構想を考えた場合、異なる思考を共有している異なる社会同士の共存の仕方が問題として浮上した。そこで、見田が提示している社会構想のモデル「交響圏とルール圏」を参照しながら、これらの社会構想を実現させるには「対話」が必要であることを述べた。

つまり、ワールド・カフェは「対話」を誘発させる具体的手法でもあることから、社会を構築するためのワールド・カフェという位置づけができる。

また、ワールド・カフェで起こる対話の初期段階「価値観の差異を前提とすること」と第二段階「自分自身と相手の価値観に目に向けること」ができる能力のことを「対話の基礎体力」と定義づけるならば、ワールド・カフェは「対話の基礎体力づくりの場」としても機能していると考えられる。

さらに、ワールド・カフェの流れに意識変革の「U 理論」を参照した結果、センシング（ひたすら観察することによって世界と一体となること）のプロセスをワールド・カフェは誘発する仕組みが組み込まれていることが明らかになった。つまり、ワールド・カフェは、U 理論のセンシングを起こす手法であり、「意識変革の装置」として機能すると考えられる。

以上のことをまとめると、ワールド・カフェは、社会構想を実現するための対話を誘発する装置として新たに位置づけられ、加えて、「対話の基礎体力づくりの場」や「意識変革

の装置」としても機能すると考えられる。つまり、ワールド・カフェは、話し合いの手法以上の社会的価値がある。

そして、本研究の目的はワールド・カフェ・デザインの可能性を見出すことであり、そのことは、ワールド・カフェの活用領域の幅を広げることにつながり、同時に、人々の対話を体験する機会が増えることを意味する。また、「社会」は「思考が共有されることで構築される」と定義づけられたことから、思考を共有する対話が誘発されるワールド・カフェは、参加者に「社会」を構築する機会を提供する。また、ワールド・カフェには「意識変革の装置」が組み込まれていると考えられることから、ワールド・カフェの場で新たな「社会」が構築される可能性もあるだろう。さらに、「対話の基礎体力づくりの場」としても機能すると考えられることから、ワールド・カフェ外の日常においても対話によって「社会」を構築することができるようになる。

したがって、本論文で、ワールド・カフェ・デザインの研究をすることは、最終的には、「対話による社会構築」へ向かっていくと言える。それが本研究の社会的意義である。